

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2394 号

Effect of antiplatelet agent number, types, and pre-endoscopic management on post-polypectomy bleeding: validation of endoscopy guidelines

抗血小板薬の数、種類、術前マネジメントごとに見たポリペクトミー後出血への影響：内視鏡ガイドラインの妥当性検証

渡邊 一弘（わたなべ かずひろ）

博士（医学）

論文審査結果の要旨

本論文は、抗血小板薬内服者における大腸ポリープ切除後の出血リスクにつき、抗血小板薬の数、種類、術前マネジメントによる違いに注目して検討し、これを始めて明らかにした臨床的に意義ある論文である。抗血栓薬内服患者が大腸ポリープ切除を受ける際に臨床的に問題になるのが後出血と血栓塞栓症であり、世界の多くの医療施設でその適正なマネジメント指針が求められている。しかし抗血小板薬に関してはその種類や内服法、休薬の有無などの条件が多彩であり、指針の根拠となるエビデンスが十分でないのが実情であった。本研究では、背景因子をマッチングさせた抗血栓薬非内服者と比較すること、内服薬数や薬剤の種類、事前の内服継続や薬剤置換といった術前マネジメントを明確に区別することにより、抗血小板薬内服者の大腸ポリープ切除後出血のリスクを詳細かつ適切に評価した。本研究の知見として、内服している抗血小板薬が1剤、2剤、3剤と増えるに従い出血率も上がること、また単剤の中でもバイアスピリン、チエノピリジン、シロスタゾールは出血リスクが上昇する薬剤であることを多変量解析も用いて統計学的に明瞭に示した。ただし単剤であれば術前に内服継続したとしても5%以下程度の後出血率であり、血栓塞栓症のリスクを考えれば術前の内服継続は許容されると結論づけた。この知見を採用すれば、不要な休薬による血栓塞栓症やこれに伴う死亡リスクを回避することができ、今後のガイドライン改訂にも寄与する可能性がある。

よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。